

東日本大震災兵庫県ボランティア先遣隊に参加して その2

I H I 播磨病院 整形外科 西川 梅雄

今回は手樽（てたる）地区避難所での様子を少し詳しく報告します。

避難所は、前述した通り廃校になった小学校を利用した「地域交流センター」（写真①）です。入り口に「上履き」と履き替えるようになっていて、廊下や部屋は清潔でした。

自主防災組織が存在していて、地震発生直後から地域住民が避難所を完全に自主運営していました。

各自宅にあった冷蔵庫内の食べ物や乾物などの保存食は全て避難所に集めて使用し、プロパンガスなのでご飯も炊けていたようです。

19日午後に東松島市からの避難住民を約30名受け入れることになり、松島町の運営に移行されました。

電気は18日に通じ、19日夕方4時頃水道水が出るようになりました。避難部屋は旧教室を利用したもので、1室最大約30名が寝起きできるようでした。



写真②保健室にあったベッドであろうか？ベッドの枠を横にして、ゴミ収集や「雑巾かけに」利用している。



写真①右側に「上履き」入れ。正面に昔ながらの黒板があって、避難者の名前など連絡事項を書くのに便利なようでした。

床には薄い発泡スチロール板を敷いて、保温に工夫されていました。

周りは瓦礫の山なのに、ごみは分別収集していました(写真②)。

女性やお年寄りには避難所の掃除や炊事などをし、あまり動けないお年寄りのための体操の時間もありました。若者男性は朝から町の復興に出て、瓦礫の後始末やヘドロのかき出しなどで、泥だらけになりながら文句も言わず、粛々と各自のやるべきことを規律正しくやっているのが大変印象的でした。泥だらけの若者が黙々と食事をしていました(写真③)。

私たちボランティアは各自の食事を持参してましたが、避難所の人たちは「カップめんにお湯を入れて、用意しましたからお昼を食べて下さい。」と言われました。



写真③朝から一仕事してきて。泥だらけの服で食事後の青年。後ろに書棚が見える。食堂は以前図書室だったようだ。

他のスタッフとも相談して結局頂くことにしました。自分たちの自宅が流され、体ひとつで避難している人も大勢いるというのに、ボランティアでたった1日たいしたこと出来ずにいる私たちに、何と親切な、何と優しい人たちなのでしょう！もし自分が逆の立場だったら、こんな親切になれるのだろうか？涙が出そうになるのをこらえながら食べました。

美味しかった……。この時食べたおにぎりと漬物(たくあん)の味は、特に大変美味しく、一生忘れられません(写真④)。

いずれにせよ以上のような人々の態度を見て、なんだかこちらが勇気付けられたような気がします。

なお約100名の避難者のうち、貧血の強い1名は手配した救急車(岡山県新見消防の車両)が夕方来て、近隣の病院へ収容されました。

約5名が慢性疾患(高血圧、糖尿病等)の薬不足でした。1名精神科疾患の方がおられました。割と落ち着いておられました。

整形外科的疾患は私の往診した1名だけでした。ただ今後復興作業に伴い、腰痛、肩こり、筋肉痛や手足の外傷等も増えるのではと危惧しました。



写真④昼食時の医療チーム。右側の2人が黙々と私たちのお世話をしてくれた。

次回(最終回)は付近の被害状況の報告をします。

T T A K新聞のバックナンバーは

播磨病院ホームページ <http://www.harima-hp.jp/>からご覧になれます。